

結びにかえて

初めてベルジャーエフの思想に触れたのは卒業論文のテーマを探していた時のことである。何気なく手に取ったドストエフスキー全集の別巻に、巻頭論文としてベルジャーエフの『ドストエフスキーの世界観』が収められていた。最初の数ページを読んでみたが、それまで読んできたものとは全く異なる文体、同語反復的で、断定的であるにも関わらず読むものを引き込むような叙述に極めて大きな衝撃を受けたことを今でもはっきりと思い出すことができる。内容についても、当時はベルジャーエフが何を言わんとしているのか分からず、最初の章を自分なりに理解するのに一ヶ月近く費やし、ようやくそれがある種の極めて独創的な思想的構成物であることに気付かされたのである。当時流行していた「現代思想」なるものを多少はかじっていたつもりであったが、ベルジャーエフの文章はそれ以上に摩訶不思議であるにもかかわらず、何か恐ろしく深遠なものを感じさせるものであった。それがどのようなものなのかを突き詰めずに通り過ぎることはできないような気がしたのである。そうした少しばかり苦々しい出会いがベルジャーエフの「哲学」を研究しようと思った動機である。

それから一貫してベルジャーエフの思想に取り組んできたが、今回になってようやく彼の哲学の形成過程や問題群について、ある程度の見通しを示すことができたように思われる。扱った時期は1910年代の半ばまでであるが、ベルジャーエフの思考を時間軸に沿って追うことで、自分なりに彼の歩みを確認することはできた。だが、一般にベルジャーエフの主著は1930年～40年代に執筆されたものとされている。その意味では、今回の論文も今後の研究の基礎となるものでしかない。それでも、ベルジャーエフの哲学の中に取り込まれた哲学的な問題のいくつかをその源泉に遡りつつ、また彼が批判の対象とした西欧哲学の知見とも比較検討してみることで、彼の思想に刻み込まれた「転回」の独自性をいささかでも明らかにできたのではないかと思う。それによって、彼の哲学が伝統的な哲学のあり方の一つとしての宗教哲学の最も興味深い領域に位置していると同時に、そこに新たな可能性を開きつつあったことを示すための一歩は踏み出せたように思う。そしてそれは、ベルジャーエフとの出会いの時から抱いていた問い、果たしてロシアに哲学は存在しえたのか、また存在したとすればどのような形であったのかという自分自身の問いに対しても、明確にロシアに哲学は存在した、それもキリスト教との独自の邂逅の下で、世界的にも優れた思索を生み出していたと答えることを可能にしている。

実は、「ロシア哲学」という言葉は研究者の間においてすらまだまだ市民権を得ておらず、「思想史」というジャンルで括られている。従来革命思想を中心とした日本の思想史研究において、哲学的な問題との取り組みが中心的な課題となっていなかったことがそうした状況の一因だと思われるが、それが革命思想以外の領域に対する等閑視を醸成したことは、ロシア文化研究全体にとっても大きな痛手となってしまった。最近でこそ、宗教思想等に対する関心なども高まって来つつあるが、蓄積が乏しいことは如何ともし難い部分がある。ベルジャーエフ研究にあたって調査した文献について見ても、日本語の論文等は大部分が英語やフランス語、ドイツ語などの翻訳によってリアルタイムに読んでいたキリスト教関係者の手によるもので、白水社の著作集もそのほぼ全ての巻が重訳である。その成果はロシア語で読むことのできない不足を補うに足るものもあるが、やはり綿密な研究には原典読解は欠かせないことを実感せざるをえない。今後は、今回提示した個々のテーマを後の展開とも絡めて討究していくことと、ロシア哲学研究の裾野を広げていくことも重要だと思うが、研究者層の薄さを見ても時間のかかる作業になると思われる。しかし、まだ我々の知らない「世界」がロシア哲学の中にあるとすれば、そこに敢えて漕ぎ出さないわけにはいかないであろう。

最後になったが、本研究が形をなすまでには周囲の多くの人々から有益な助言や示唆を受けた。その一つ一つが自分の手を介してここに結晶している。ある意味では、そうした形で自分なりにソポールノスチの一端を垣間みることができたかもしれない。ここに記してその全ての人に謝意を表したい。